

消えゆく大阪ことば

専門家らがトークショー

標準語化に問題提起

「大阪ことばと庶民のくらし」と題したトークイベントが5日、大阪市中央区の日本料理花外楼で開かれた。大阪天満宮文化研究所



「大阪ことば」について語る近江さん(左)と松寺さん。5日、大阪市中央区

の近江晴子さんと関西芸術座女優の松寺千恵美さんが、近世に形成された船場の言葉をはじめとする大阪弁の現状を解説。都市形成や生活環境の変化を背景に大阪固有の言葉が薄れ、標準語化しつつあると問題提起した。

船場言葉として家や店の主人を意味する「旦那さん」、その妻の「御寮さん」、年季奉公する「丁稚」などがあり、近江さんは「暮らしの土台があって育てられた言葉だ」と説明。その上で、船場の人々が郊外に移り住んだことによって「船場言葉は減びてしまった。重要無形文化財になった」と指摘した。

東大阪市出身の松寺さんは、若年層の大阪弁の現状に言及。核家族化が進み、共働き家庭が増える中で「言葉は」テレビの音声から入り、標準語っぽい大阪弁になっている

(深田巧)